

神戸ボランティア研究「支援の実践知」

— 〈ひとりの人として〉をめざす支援の実践知

似田貝香門

一 神戸の被災者支援の総括の原点

「震災一〇年に向けた総括の原点」というのは、震災直後の一番しんどい時に、人を支えたのは人やという、あるいは生活そのものがなかったから、非日常だったからかもしれないけども、顔の見える共感があった。あの一番しんどい時に。それを、震災一〇年経って、どない被災地発の人のあり方にしていくのか」(二〇〇二／八／二〇)。

震災から七年目に、拓人こうべ(旧名称…被災地障害者センター)の大賀重太郎¹さんが私たち調査グループ

に述べた言葉である。一〇年目にはまだ二年半ほどあるにもかかわらず、である。

「人を支えたのは人や」、「顔の見える共感」という表現こそ、後に見ることく、私がこの論考でその活動を紹介したい阪神淡路大震災のただ中から生まれてきた支援者の黒田裕子さん、大賀重太郎さん、そして村井雅清さんたちの、最も重要な被災者の自立支援活動そのものである。

さらにこれらの表現は、震災以来一〇年、長らく調査を媒介として相互に対話をしてきた私たちからみれば、いま生まれつつある、ひとの苦しみや受難にたいする、自立の支援活動の行動思想の、中間的総括の原点であり、その実践知の（経験的定義）でもある。

そして「どない被災地発の人のあり方にしていくか」という言葉は、自立を希望する被災者の生活の有り様を、遙か彼方を卓望する願いにも通ずる。それは、日本社会の支援の実践の可能性を見すえ、おぼろげながらも、〈自立への支援〉という行為によって生み出される、これからの〈ひとの在り方〉をはるかに描こうとする、生みの苦しみの表現でもある。

たしかにこの一〇年間、さまざまな災害が、日本をはじめ世界をみまわった。ここで紹介する三人のみばかりでなく、震災以降、少なからずの方々が、神戸という被災地にこだわり、支援の活動を継続させてきた。そしてこの活動を他の被災地に拡げ、そこでまたその活動に多くの人びとが共振、共鳴されていった。

黒田裕子さん⁽²⁾の中越震災の支援活動、村井雅清さん⁽³⁾の台湾、トルコ、イラン、アフガニスタン、新潟県中越地震、そしてスマトラ沖の地震ではスリランカなどへの積極的な支援活動が、それらの例といえる。

このような神戸から活動を発信させると活動の在り方は、これまでのように、活動・運動の普遍化をめざす

在り方でない。あくまでも、被災地神戸の発信し得る、個別具体的な支援の経験をもって、他の地域の被災者や障害者の自立の支援の活動を掘り起こし、それが逆に、相互に刺激しあうことによって、そこから当の神戸の活動そのものの持続的活動が生み出されてきた。そしてこの動きこそ、あたかも地下茎のように、どこからでも広がっていく新しい市民活動の動きを潮流として生み出しつつある。

一 一 草地賢一さん、黒田裕子さん、大賀重太郎さん、村井雅清さんとの出会い⁽⁴⁾

一九九五年一月から三月、一五〇万人もの多くのボランティアが、「とりもとりあえず」阪神・淡路にあつまり、多くの被災者の救命・救援の活動が行われた。大規模に出現した、こうした生命〓生活の苦難・受難への救援・支援の行動が、現代日本社会に与えた実践思想的インパクトはきわめて大きかった。

しかし、救命・救援のレスキュー段階をすぎた復旧・復興期にはいると、ボランティア活動は潮が引いたようにいなくなっていく。

当時「地元NGO連絡会議」代表の草地賢一さんは、九五年八月、私達との話し合いで次のようなことを述べた。

「レスキュー（救出・救命）段階では、思想や方法が何んでもあろうともレスキューが最重点である」。しかし「その後、この震災で、貧しい人がますます貧しくなっていく」。にもかかわらず「公共当局の行政や政治が行われていない」と。そして原因として、第一に、行政の「マニュアルがないという状態」や、「意思決定の稟

議的方法では、例外事項機能不全状態で、いつまでも初動的状况」であること、さらに第二として、このような「緊急事態においてシビル・ソサイアティが実現できないとは、学者や学会、官界がこうした問題を建て前論で考えてきた問題点である」と鋭く指摘した。それは怒りでもあった。

草地さんは、日本にはボランティア活動はあっても、それは「入門段階」だ、という。復旧―復興段階にこそ一番問題が起きるといふ。事実、そこからいわゆる生活再建や自立困難な「震災弱者」がこの時点から生み出されていったことは、早い段階で、すぐにでも多くの人に認識されていた。ここに日本社会が弱者の自立にたいする支援の活動の大きな課題が残されていた。⁽⁵⁾

この事態のなかから、日本におけるボランティアの弱さを認識し、あなた方の専門である社会学こそが、ボランティアの組織論を本格的に取り組むべきである、と草地さんは強く要望した。

私たちもまたその約束を果たすべく、日本の社会の新しい支援の実践―理論、あるいは支援の思想の萌芽を求め、神戸において、あの緊急的な救命活動から、その後、今日まで被災者の自立のため支援をし続けてきた多くのボランティアのリーダーたちや、この震災を契機に、支援に腐心しはじめた宗教家、建築、まちづくりプランナー、医療や福祉の関係者等の多くの職能者たちと対話を続けてきた。このなかで震災当初からこまどぎれることなく対話が続けられてきた方々がこの三人である。

一昨年(二〇〇四年)、村井雅清さんから私たちに、「黒田裕子さんの活動をぜひ本にしたい」というかなり強い要望があった。自分が黒田裕子さんについて書くから、専門家である皆さんの方でそれをまとめてほしい、というものであった。こうした要望がわたしたちに寄せられたこと自体大変うれしいことであったが、他方で、

個別の研究は報告されても、共同の研究報告書をまだ仕上げていない私たちにとってはきつい、要望でもあった。

支援実践者たちが、その時々々の活動のなかで支援の困難や、望むべき活動の在り方に関して、深く感じ取り、そこから実践に裏打ちされた、反省や中間的な総括や思いは、支援の活動の自律的表現として、それは大切な「言葉」となってあらわれてきた。

しかし時の流れや忘却される震災の記憶、余りにも遅い私たちの研究は、この「言葉」の意味を消失させ、無力化させてしまう。大いなる反省がわたしたちに迫られた。

人の活動の自律的表現としての大切な「言葉」は、たしかに時の流れのなかで無力化される。しかし企画を進めていくうちに、私たちは敢えてこれらを、被災者の自立支援活動の「記録」として残したい、と心から思うようになった。阪神・淡路大震災以降生み出されつつある、支援の実践やその行動思想は、忘却という社会の流れに抗するものとして、それが新しい市民社会を形成する萌芽の一つとして、どうしても「記録」される必要があると思うからである。⁽⁶⁾

生まれつつある〈支援活動の思想〉は、支援活動から遠ざかる社会の時の流れに耐えるものとして、経験化し、定義化される必要がある。それが執筆者を支援する私たちの強い意志である。事実、私たちはこの三人をはじめ多くの支援実践者から学んできた。このような実践者がこの困難多き社会に存在すること、そしてこの三人のような実践者が、私たちの身近の場所に、私たちの傍らに、困難な問題の周辺に存在することを見たい。

三 支援活動の基本思想——〈生の固有性〉へのこだわり

黒田さんはいう。「震災によって種々な苦痛を抱き、その苦痛と向き合っている人間が、今ここにいる。そして、生活をしている。このことがよりよいケアの第一歩であったからである。それによって、一人のひとしの命を重んじることが出来るからであった」。何よりも確実な苦しみがあり、受難があった。

黒田さんは「ひとりの人として救う」といい、大賀さんは「障害者問題へのこだわりという『原点』を支援活動の支点に置く。そして村井さんは、「たったひとりを大切に」「最後の一人まで」という。このように、黒田裕子、大賀重太郎、村井雅清の三人の支援活動に強力に伝わってくるのは、個々の被災者のもつ一回きりの命への支援、あるいは個々のひとの歩んできた生への支援へのこだわりである。

このようなこだわりを、阪神・淡路大震災の被災者への自立の支援の視点としての〈生の固有性〉、と呼んでおきたい。新しい支援活動の基本思想と考えてもよい。

被災者の生命＝生活の回復という「希望」は、個々の被災者が、生活しその年輪を加えてきた自己の生の他ならなさ、すなわち〈生の固有性〉そのものである。

三人の支援活動は、こうした個々のひとの現実に生きてきた状況から出発する。その人をその人なりに見ることに、支援の基本がある。この考え方は、従来のように「みんなのために」という発想が中心ではなく、また個人を社会がみんなと同じに扱おうとする支援行為に基本があるのではない。むしろ「そのひとのために」

「ただ一人のために」、ということこそがサポートの基本思想となっている。

ひとの生命活動への支援は、これまではなにより平等な、普遍的な、行為が不可欠であった。レスキュー段階で、多くのボランティアが全国から広範囲、「とるものもとりあえず」かけつけ、救命・救援活動が行われたのは、まさにこの支援思想である。この思想は、だれでもが、誰に対しても、いつでも、どこでも、という支援のひとのあり方として普遍的である。

無論、黒田、大賀、村井の三人も多くの仲間の方たちと、このレスキュー段階に、文字どおり寝食を忘れて懸命な支援活動を行い、そのコアとなる支援の組織化に没頭したことはいうまでもない。

しかし問題は、草地さん指摘したように、生活再建や自立困難な「震災弱者」が生み出されていった復旧―復興段階以降の、支援のあり方である。ボランティアがほとんど引き上げ、支援への活動自体への周辺の寛容性がひどく落ち込みつつあったなかで、「その人のために」、「ただ一人のために」、という支援活動は、もっぱらこのような状況に耐えることを余儀なくされていった。

「活動をなかなか理解してくれない」、と異口同音に支援実践者という。「ボランティア活動は、みんなのためにあるのでしょーう」。無論そのことに間違いはない。しかし今は、生活再建や自立困難な「震災弱者」の支援こそが問題なのだ。この普遍思想になかなか抗しえないもどかしさのなかで、それでも、今日までほぼ一〇年も耐えてきた活動である。

四 新しいボランティア行為

こうしたこだわりは、あきらかにこれまでの支援活動・運動の考え方とはいささか異なっている。

彼らのボランティアの活動、支援の活動は、つねに被災者の〈現実の生きた状況〉から出発してきた。

〈現実の生きた状況〉からの出発とは、被災者のおかれた状況の変化と、そこからそのときときに生起する、個々の被災者の固有の問題そのものを、直接支援するという考え方である。そのためこの〈生の固有性〉に關わる新しい課題化、テーマ化が次々と立ち現れ、それへ対処を余儀なくされる。もはや普遍的思想などといつていられない事態が矢継ぎ早に彼らを襲った。

彼らの活動が今日まで一〇年以上にわたり持続しえたのは、それは何よりも、被災者の「希望」が、〈生の固有性〉の回復にこそある、という彼らの信念の堅固さにある。「その人のために」、「ただ一人のために」という支援の視点にこだわったからである。そしていまや彼らの支援思想は立派に經驗的にその有効性を発揮しつつある。彼らが支援活動をしつづけ、あらゆる困難にもめげず耐えてきたことそれ自体、被災者にとって「希望」だったし、今でも「希望」なのである。

被災者の自立のため、そのひとの〈生〉の固有性にこだわるといふ支援の考え方は、その人その人の、人間としての存在のあり方、生存のありかたとしての固有性を尊重し、配慮することを通じて、社会に個と集団の基本的な自立化をうながすきっかけの可能性を実践的にめざしている。⁽⁷⁾

これまでのボランティアの思想、支援の思想が、「みんなのため」、「社会のため」に視点が向かっていたとす

ると、彼らの支援の視点は、「その人のため」、そのひとの〈生の固有性〉へのこだわりに向かっている。

「みんなのため」、「社会のため」に向かう支援思想がこれまでのボランティアの行為とするならば（ボランティアリズム）、新しい支援のありかたは、ミクロなボランティアの行為と呼ぶべき実践思想である（ミクロ・ボランティアリズム）。

この一〇年の間、多くのボランティア論やNPO論は、いつのまにか現実の支援や具体的諸問題レベルから離れ、社会の中での役割論に大きく論調が傾斜していった。いわば、ボランティアリズムのマクロ化である。

しかし彼らのようなミクロなボランティア行為が現れつつあるということは、日本社会の現実にとつておきな意義がある。

現在の日本社会は、病院・老人施設・学校・職場・近隣・家族生活という社会レベルのあらゆる領域、場面で個別の社会問題が現れ、そしてこれらの問題は、未解決なものとして強固に存在している。それが故に、おおくの自立の困難、不安という「痛み」、「苦しみ」が、あらゆる社会領域で持続し続けている。

しかし彼らのような支援活動の基本的な実践思想の現れは、こうした社会問題への取り組みの社会的実践の回復が、まさに当のミクロな社会レベル領域や場所で生まれていることを意味している。いわばミクロな政治力学の場の存在の可能性を表現しているといえる。ミクロ・ボランティアリズムは、こうした意味で新しい社会的文脈を創造しつつある。このような場で、ひとびとの〈生〉の回復の実践行為が試みられつつある、といつてよい。

被災者の〈生の固有性〉の支援、というかたちであらわれるミクロ・ボランティアリズムは、ひとりひとりの人

間の、〈生の固有性〉の問題を、私的領域の問題として留めたり、あるいは切り捨てることはしない。可能ながぎり、具体的な個人を、「顔の見える」関係としての集団の支援活動を介して、社会へつなごうとする支援行為である。それは社会の領域に、具体的な自立の困難、不安という「痛み」、「苦しみ」を抱えた諸個人の問題を、新たに提起し、それを多くの人によって討議実践されるべき公共性の問題として、あるいは新たに形成されるべき社会正義の問題として組み込むべき、「市民社会」の新たな生成のテーマでもある。

彼らの言葉や行為表現自体が、被災者の自立支援が可能にするため、それを阻止している要因を克服対象として認識し、それを変える方法へと切り返す、という〈生〉の生成世界を形成しようとする社会実践である。

黒田さんは「ひととひとが向き合う」、大賀さんは「顔の見える関係」（大賀）、といい、村井さんは「自立とは支え合い」という。言葉や表現は異なるが、ひとびとの〈生の固有性〉への支援が、当事者をふくむ支援者との「顔がみえる」関係という、いわば小さな具体的集団の形成と不可欠となっている。〈生の固有性〉への支援とはこのような実践的集団性の形をとるのである。

社会領域に問題を組み込んでいく活動単位は、このように小さな範囲である。彼らのようなこのような動きが、もしあらゆる社会問題のかたわらに生まれたならば、それは地下茎のようにどこからでも、そしてどこへでも広がっていく新しい活動の動き（潮流）を生み出していくにちがいない。

最後に、一つの課題を考えたい。

黒田さんは全国からの支援によって組織された「しみん基金」を核として、被災者支援団体の支援実践を、また中越震災への支援を介して幾多にも支援の根拠地をつくり、大賀重さんは市民の「共感」を呼び込む活動

の形成の実践の有り様に長らく腐心してきたし、村井さんは「まけないぞう」の運動を全国のあちこちで、また世界に向けて「被災地KOBÉ」から発信する支援のネットと根拠地形成を、実践してきた。

この実践は、一方ではミクロ・ボランティアズムから、あちこちに根拠地を形成しそこからまた地下茎が伸びることを願う、という水平的活動体として、他方では、多くの市民を傍らに組み込んでいき、次第にその支援のための支援の輪を共振させていき、そこからマクロ・ボランティアズムへと結びつけていこうとする尖端的動きでもある。それはミクロ・ボランティアズムからマクロ・ボランティアズムへと、単に垂直的に架橋していく動きではない。おそらく、ミクロとマクロが、同じ支援の活動体にあつて横断的に複合化されて行くような実践論である。私たちはもつとこの実践論の可能性について知ることが必要である。

五 黒田裕子さん、大賀重太郎さん、村井雅清さんの実践的な言葉（語録）

（一）黒田裕子さんの実践的な言葉

「瞬間を大事にする」

黒田さんの実践は何よりも、臨床的であり現場的である。被災者が今被^{こうむ}っている現実そのものを直視する。被災者の今のニーズを捉える。そこから支援を出発させる。（現実の生きた状況）への支援者の対応は、そのつどそのつど、という瞬間を逃すべきでない。その対応が完全なものでないとしても、何よりも支援行為そのものは、そのつどのいつとき一時が大切、という。

支援は、個別具体的問題としてあらわれる。またそれらの問題はほとんどが複合化している。しかし、生命に直結する、生活問題は、緊急的であり、何をおいても一時、局所的、具体的に対処しなければならない。「瞬間瞬間の必要性に目を向ける」ことが支援行為にとって不可欠である。

だからといって、複雑な問題を回避するわけではない。黒田さんは、「人間の生活がある」、「今を生きる」そして「最後まで生きる」と表現している。ひとが生命＝生活への支援は、一時性から、持続的に生をいきる、ことを支援することをテーマとしている。

「つなげていく」

この表現は、被災者の抱える諸問題を解決するため、さまざまな他のサービス機関や団体、人等にネット・ワーク化していく支援行為の主要な役割のことである。複合化された問題ほど、このような「つなげる」行為が不可欠であるという。その意味では、支援実践者の行為は、問題を認識し、解決のため社会資源を所在に向けて的確に、解決課題を調整し、配分する媒介行為である。しかしもっと重要な点は「つなげる」ために、自分が変わらなければならないことである。

その問題を認識し、解決に向かって諸問題を調整し、統合する行為は誰にでもすぐにはできないことではない。本書でも書かれているように、黒田さんは震災直後まで看護職であった。多くの被災者の抱える問題を受け止めるには、自分が看護職であることにこだわったので前へ進めなかった、と黒田さんはいう。

支援活動を重ねるたびに、自分の看護職という職能の見直しが必要になってきたのである。「瞬間を大切に

する」の項でもふれたが、時の変化とともに、被災者の自立の環境は、つねにめまぐるしく変化してきている。支援実践者はこうした状況認識と、そのつど被災者の自立にかかわる問題視点を変化させねばならない。

避難所から仮設住宅へ、さらに恒常住宅へと、そのたびにあらわれるテーマや課題をどのように認識しどのような方向に持つて行くか、という時々々の状況がある。この状況認識の錬磨と対応の判断の的確さを望むには、看護職という意識を敢えて捨て、職能者として向かい合うのではなく、「人間対人間の関わり」のなかで、「相手と本気で向き合う」ことしか、「その人その人にあわせたケア」はできないという。

現代社会の対人サービスは内容別にセパレートされた職制のもとにある。職制のもとのサービスは、個別化されており、なによりもどの職制も、当事者の問題を統一的に理解し、それを必要なサービスの資源元に配分する役割を果たしていない。ソーシャル・ワーカーのような職制はあるが、これとてもまだまだ十分でない。とりわけ震災時には問題が多い。

「つなぎ」という行為は、専門職が自らの職制を見直すことのみならず、他の多くの職制のそれぞれの分野を「つなぎ」、被災者の周りに社会的な小集団を一時、意識的に形成することである。「その人らしさを尊重してケアをする」には、「つなぎ」という実践が不可欠、という考え方である。

(二) 大賀重太郎さんの実践的な言葉

「隙間と混在」

被災地の障害者の自立を支えるため、サービスの「制度からはずれた部分」もあわせて支援活動に取り込む

という考え方が、〈隙間と混在〉の基本的な考え方である。「制度からはずれた部分」を取って意識的に取り込むという認識が、「隙間」をつくるという表現になっている。

なぜ取って取り込むのか。大賀さんたちの活動が、被災者支援の「障害者問題へのこだわり」という「原点」をもち、しかもその支援活動はあくまでも「顔の見える関係」のなかで行われるからである。

このような、制度的には不在のサービスを、あえて意識的に支援活動に取り込む、ということは、実践的には以下のような空間を創造する試みである。

障害者のニーズという私的領域と支援者がそれを支援活動として集団化という社会領域の「混在」化、そしてそれをテコに、支援者によって実践化された社会領域と公的領域の境界を曖昧化させ、「混在」化させるという実践空間の表現である。黒田さんの「組織人であるが、組織人ではない」という表現も、実践者に視点をおいているという違いはあるが、ややこれに似かよっている。

こうした異なる活動の意図的混在化をはかることによって、一方では、余儀なくされた支援者の取り込み、他方ではむしろ従来の公的な制度的サービスの境界線の限界を穿つ^{うが}。

より実践的には、隙間という領域の中で、そこに制度化された実践、可能としての実践等の多様な実践が共存し、そしてそれらが混在し、やがては次第に、相互関係として融合することを期待される実践空間でもある。

行政は福祉サービスの受け皿を、かつての障害者運動体ではなく、事業体に求め、運動と分離させてきている。大賀さんたちのセンターは、それらを分離したようなかたちにし、しかし「一方で運動、一方で事業」と両義的に取ってしままま「事業体にのめり込む」という混在方法をとっている。制度的サービスと非制度的

(その時々之余儀なくされた必要なサービス)が、実践的には後者の必要性に応じてその時々瞬間的に生み出され、相互浸透する、いわば実践の創造産出的な思想である。

「関係を切らない」

これは、支援実践者にとって、被災地障害者の希望が、非経験的であったり、実現そのものが困難なニーズだからといって、障害者―支援者の「関係を切らない」という考え方である。

対応としては、ひとまず可能な解決から手をつけ、難しい問題は、話し合いの上、「休ませてくれ」というかたちで留保される。あるいは「誰かにフォローしておいてもらう」。

「こちらから切るといえるのは、その人の生活・人格の否定」になるといえる。支援の留保、支援の実行の中断、支援の意思決定を未決定にしている、ということとは、当事者を無視、排除することなく、問題を当事者の私生活の領域に押し込め、社会領域に支援者として取り込まないことでも、当該の問題の放棄することでもない。

むしろこのようなときこそ、自分に何ができるかを考える、いわば未決定の中での準備的実践を内包している。出来事一つ一つに、「相手の在り様」を「自分探し」と重ねて、相手を「認めよう」とすることが肝心と大賀さんは考えている。

それは他者と出会っている、といえよう。出会っていると言うことは、他者を認識するのではなく、他者体験の事実から出発していることである。いわば、この「関係を切らない」という過程で、支援者自身が、自己を

複数化する努力をしている試みである。

(二) 村井雅清さんの実践的な言葉

「何でもありや！」

村井さんのこの表現は、「震災後の多様で、自発的で、創造力のあるボランティアのあり様が、被災者の多様なニーズに対応できた」という文脈が中心である。村井さんはこの表現を震災五年後から使用したという。しかし逆に言えば、その時点および現時点では、支援活動の苦しみをも表現している。

この表現が、災害のいかなる時にもっとも有効に、効果的に、かつ生き生きしていたか。大震災という、非日常的な異常な事態が、日常の秩序では「ありえないこと」を可能にした、という状況認識は、まったくその通りであろう。

いかなる支援活動であろうとも、いかなる試みであろうとも、被災者の「救命・救援」であるかぎり、被災地域ではおおむねそれを、寛容に受け入れていた、という時期がある。震災直後の支援から仮設住宅への支援へと移るこの期間が、もっとも「何でもありや！」が実践可能であった、と思う。

「決して無秩序ではなかった」、「そこには、何かお互い暗黙のルール」があり、それは「命は大切にしよう、せっかく生き残ったんだ、気いつけてな!」というお互いの気遣い」と、村井さんはいう。

レスキュー段階（非日常）では、支援者も、多くの被災者市民も、人びとの苦しみや苦難、困難の中に被災者の存在を見たし、また実感できた。それが故に、支援者は、「てれくさくなく」（鷹取救援基地）の和田耕

三さんの表現「純粹に、思うとおり、支援行為を行った。そしてその活動の振る舞い方は、多くの被災者や市民の十分な〈優しさ〉と見ていた。「何でもありや!」はこうした時期の、支援者と市民との関係性によって可能化されたといえる。

ボランティアは、対象者と一つになった時に、〈ふれあい〉が生まれる、という。このレベルで、「何でもありや!」は成立する。被災者とふれあっている支援者には既存の規則(ルール)はいらない。むしろ支援活動は、ボランティア活動をマニュアル化し、パターンにはめてしまう規則から自由でなければならぬ、という考え方である。「制度からはずれた部分」を敢えて意識的に取り込むという認識から、活動に敢えて「隙間」をつくった大賀さんたちの「隙間と混在」より、もっと自由である。いやむしろこの時期自由でなければならなかった。

何度もふれたが、支援活動は、「たった一人を大切に」、「最後の一人まで目線を向ける」という、〈生の固有性〉への視点のこだわりであった。

「十人十色」

村井雅清さんはふと「あのときはよかった」と、言葉を漏らしたことがある。「あのとき」とは、レスキュー1段階のことを指し、なぜよかったのかといえば、「ボランティアは十人十色だった」という。支援者はいろいろな経験と資格をもって活動していた、ということを鮮明に表現している。

「震災後の多様で、自発的で、創造力のあるボランティアのあり様が、被災者の多様なニーズに対応できた」

と村井さんは、当時を総括する。

「ボランティアとはこうである」という倫理・道徳的定義や、「ボランティアはこうでなければならぬ」という同型の単独的な定義は、あらゆる支援要請が起きる現場にはほど遠い。

支援者はじつは実際には十人十色。支援者としていろいろな人が来て活動した、ということは、これらの支援者が被災者をいろいろな目線で感じ取り、活動内容をそのつど判断し、実践していた。このことが重要である。

同じ人が、様々な問題を抱えた被災者を、同じような目線で見ても、その人の抱えた問題を見て取ることができないことがある。ということは、様々な被災者の苦しみの（呼びかけ）に、支援者が応答できないことが多い。

アルコホーリックの人に対する対応できる人とできない人がいる。しかしできない人がいても、対応できるボランティアが仲間にいる。

大賀さんが「うちのところのメンバー、一人一人はもう穴だらけで、一人一人の解決能力ではとんでもない話になるんやけども、こんだけ個性の違うやつがいて、それぞれの対応の中で、何とか方向づけができていて、というのが実態やと思うんです」と同じである。

多くの場合、手に負えないとか、無理だと思つたら、その人との関係を切ってしまう。時には排除してしまう。あるいはもう差別してしまう。しかし、同じボランティア仲間の人が対応できる、ということを知つたならば、その人はその被災者との関係を切らなくてすむ。私はできないけれど、他の仲間ならできる。これは支

援活動にとって非常に重要なことだ。

このような被災者の〈呼びかけ〉への応答可能な仲間がいるおかげで、私は被災者の〈呼びかけ〉に対し、無関心や、排除するということから免れられる。したがって〈呼びかけ〉への支援活動は切断されることなく持続される。「関係をきらない」実践知の源泉は、こうした支援者の多様性にある。

被災者の〈生の個別性〉は多様性である。ひとの生は多様である。生の多様性として受け取る支援者側もまた多様であることが不可欠となる。

しかしいろいろな要望が目の前にあらわれたときに、それを全部受け入れられることは不可能である。どこかで〈限界〉がある。こうした限界は、〈個の有限性〉と呼ぶ事態である。一人では自分をいくら変え、自己多様化しても、あるいは自己複数化しても限界がある。

つまり有限性という、個の人間としての限界である。自己の限界を受け入れることが他者の振る舞いを認めることになり、それが「多様性」を認識することになる。異なる振る舞い方をする仲間内をまず見る。それは認めやすい。こうした仲間内の中に当事者を受け入れる支援者がいることによって、何よりも自分は当事者との関係を切断すること無く、保留しておくことが可能になる。

「十人十色」とは、支援活動の多様性と、この多様性そのものを経験するきっかけとしての個の有限性が、相互的に関わることによって、やがては「共生」というテーマにつながる重要な実践知である。

参考

別表（ゴチックは、（二）（三）で論じたもの、ないしふれたもの）

（一）黒田裕子さんの用語

- ・ 人間の生活があり、生活する人間がいる
- ・ **瞬間を大事にする**
- ・ 人としてのいのちを重んじる
- ・ 最後の一人まで見捨てない
- ・ 最後まで生ききること・自立
- ・ 聴く姿勢
- ・ ファイードバック・ミーティング
- ・ **組織人であるが、組織人ではない**
- ・ つなげていく
- ・ 黒田は全部の中の黒田
- ・ 地域／くらし／人間・場づくり／人づくり
- ・ 地域が地域をみる・老人だけでなく子どもとの連動
- ・ コミュニティを作る

・自立と共生

(二) 大賀重太郎さんの用語

・支え合い

・障害者問題へのこだわりという「原点」

・顔の見える関係・草の根の活動

・違いを認め合う

・自己決定・自立

・関係を切らない・抱えこまない

・隙間と混在

・市民の共感

・事業

・ネットワーク

・開発・開拓

・セルフ・マネージメント

・緊急の救援活動から障害者市民活動へ

(三) 村井雅清さんの用語

- ・何でもありや！
- ・たった一人を大切に
- ・私にできることは
- ・十人十色
- ・最後の一人まで目線を向ける
- ・排除の論理ではなく包摂の論理
- ・バラバラで、(なお)一緒！
- ・自立・自律とは支えあうこと
- ・いつとき・こだわり・継続性
- ・しごとづくり(仕事開発)
- ・もう一つの市場、もう一つの働き方
- ・社会との関わり
- ・顔の見える関係
- ・かけがえのないボランティア
- ・自立と生き甲斐
- ・協働

- (1) 特定非営利活動法人「拓人こうべ」(旧名称:被災地障害者センター)は、一九九五年の阪神・淡路大震災後、障害者自身による救援活動の拠点として活動し、その後は緊急支援から生活支援へと活動内容を障害当事者の必要に応じたものへと変え、一九九九年、特定非営利活動法人となる。大賀重太郎さんは現在専務理事。
- (2) 黒田裕子さんは、「阪神高齢者・障害者支援ネットワーク」理事長、しみん基金KOBEL理事長。震災直後、神戸長田高齢者・障害者支援ネットワーク(現、阪神高齢者・障害者支援ネットワーク)は緊急二次避難所として、サルビアデイホームを拠点に高齢者や障害者の緊急支援を行ってきた。
- (3) 村井雅清さんは、「被災地NGO協働センター」代表。この団体は震災直後、自然発生的に組織化された諸支援団体・グループを組織化し、「人間は一人では生きていけない」というごく当たり前のことを実践から体感し、その中から「自立とは支え合うこと」という実践理念を中心に据えている。
- (4) これらの方々の支援活動の実践知の様相についての詳細は、似田貝香門編『ボランティアが社会を変える―支え合いの実践知』(編著、関西看護出版、二〇〇六年)参照。
- (5) 草地賢一、一九九五、「市民とボランティア」酒井道雄編『神戸発 阪神大震災以降』岩波書店。似田貝香門、一九九六、「再び『共同行為』へ」環境社会学『環境社会学研究』第二号、Vol.2。
- (6) 注(4)の似田貝香門編(二〇〇六)参照。
- (7) 〈生〉の固有性へのこだわりの実践思想は、被災者の個々の人間の存在の生存様式としての固有性を配慮することにより、個と集団の本源的自立化作用をうながす基礎な考え方を包摂する。したがって、他者に対するの主「自立的」振る舞いでなく、他者とともにある「自律的」あり方が追求されるのである。したがって、本当は、他なるもの存在によって、絶えず自らが脅かされと感じざるをえない「自立性」の用語よりは、他者との関係によって、むしろ自らでありうる「自律性」の用語を使用したいところである。

追記

本稿は、似田貝香門「一人の人としてをめぐす実践知」（似田貝香門編『ボランティアが社会を変える——支え合いの実践知』関西看護出版、二〇〇六年）を改稿したものである。

（にたがい・かもん 東京大学大学院人文社会系研究科教授）

Practice of the support : it aims at 〈as a human of the one-man〉

Kamon Nitagai

It is an origin of the medium generalization of the action thought of the support activity of the independence of the human who is produced at present for distress and suffering, if the speech act in the practice of support persons is observed from we who have mutually done the conversation in making to be mediating the investigation with the length support person for 10 years since earthquake disaster, and it is earthquake disaster, and it is 〈experiential definition〉 of the practice.

The ideal way of the activity is not ideal way with the aim of the generalization of activity and motion until now, when the activity is sent from such Kobe.

To the last, by having experience in the support of which possible sending individual in the damaged area Kobe is concrete, the activity of the support of the independence of victim and the disabled of other region is dug up, and encounter which it reversely and mutually stimulate has been producing the continuous activity of activity itself of Kobe of there.

Then, the movement of the new citizen activity in which just this movement expands like subterranean stem from where as if is produced as a tidal current.

Human autonomous important addition time ineffectiveness, however, these would be thought we leaving as “record” of the independence support activity of the victim in the inside which advances the planning specially, from the heart “language”.

As a result of resisting in the society flow of the forgetting, practice of the

support and the action thought produced after Han-Shin Awaji Earthquake disaster are because that “it is recorded” must be done at any cost as one of the germination in which it forms the new citizen society is thought. The Miss.Kuroda pad calls it “it is saved as a human of the one-man”, and Mr.Ooga puts “ [origin] of the adherence to the disabled problems” in the supporting point of support activity.

Like this, what powerfully transmits for this human support activity is the adherence of 1 time drill of individual victim to support to the life or support to the living in which individual human has walked.

Such adherence wants to be called 〈living characteristic property〉 as a viewpoint of the support of the Han-Shin Awaji Earthquake disaster independence to the victim, it may be regarded as a basic thought of new support activity.

For the independence of the victim, the approach of the support of sticking to the characteristic property of 〈living〉 of the human aims practically at the possibility in the chance which stimulates [Ko] individuality and fundamental independence of the group in the society through respecting and considering the characteristic property as ideal way of the existence and ideal way of the survival as a human of the human the.

The ideal way of the new support is practice thought to be called a action of the micro volunteer (micro voluntaryism).